

回 会 報

147号

平成二十六年総会開催される

六月七日午後二時より東京板橋「ハイライフプラザ」に於いて、平成二十六年新日本美術協会の総会が開催された。総会直前の委員会にて意思統一された手順に従い開催された。

総会司会は富岡委員、議長には永野委員、議事録担当に早田委員、議事録署名人に小高委員が指名され議事が開始された。

議決要件の員数は会員数195名に対し出席者29名、委任状77名で過半数(98名)を超え成立したことが議長から発表された。議案書は五月に事務局から全会員に配布済みでこれに基づき議事は進められた。

第一号議案、二十五年事業報告を森屋事務局長が、収支決算報告及び財産目録報告を鈴木(忠義)委員が、会計監査報告を相楽委員がそれぞれ行い満場の賛成で承認された。

第二号議案、二十六年事業計画案を森屋事務局長が、収支予算案を鈴木委員が説明を行い全会一致で承認された。

議案以外の事務事項として事務局長から会員の退会・休会・入会者の報告及び新任委員の紹介が行われた。その他一般事項では会の運営活性化についての意見が多く出された。午後四時全ての議事を終了閉会となった。

新任委員の紹介



福井県 神内 巍

この度新日美委員の委嘱をお受けしました神内です。

北陸の福井県という地方在住にも拘らず、はたしてお受け出来るものかどうかと随分迷いましたが、

新日本美術協会

事務局
千葉県柏市大津ヶ丘
3-17-17-401
森屋治三方
TEL04-7191-6760

編集委員
小高峯夫
富岡 亨
大石 亨
四方 公子

原稿随時募集
次号平成26年11月予定

私のようなものでも多少なりともお役に立てることがあるのであればと、決心をした次第です。

思い起こせば、平成一九年、新日美京都支部の先輩の薦めで、新日美展に出品させて頂いて以来、7回の出品を続けることが出来ました。私にとっては大変よかったですと思うところから、も頑張りたいという決意を新たにしたいところです、またその間のあたたかい指導に、心から感謝しております。

福井県出身の画家鈴木千久馬が美校当時藤島武二先生から受けた叱正に「滑りよく自由そうにまとめるだけではなく、もっと対象がごちゃ取り組んで、不自由でもかまわないから十分突っ込んでみる」と指導された事があったこと、まさに今の私への言葉ではないかと思えます。自分の感動・主観のみ制作・表現するだけでは力強さはあつても軽い絵になってしまう。何枚もエスキースを重ねる中で対象としつかり取り組み、キャンバスに向かう、まさに不自由を克服することで得られる自由、バランス感覚のある自由な絵を目指すべきではないかと考えます。

さらに県展、市美展、はじめコンクール・公募展など積極的に応募する中で、自分を磨き作品のブラッシュアップを図ることに精進してまいります。このことが、地方在住者がその役割の一端を担うことに通じるのではないかと考えております。

今までの新日美を支えてこられた諸先輩方に感謝するとともに、今後の会発展に少しでもお役に立てるよう頑張ります。今後ともご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。



栃木県 増野 喬

このたび委員を委嘱され、その重みを感じております。今美術団体、

そして当会を取り巻く環境は厳しい状況にあります。会員数減少傾向と高齢化、若い人たちの公募展への出品減少など団体の将来にかかわる問題です。増加させながらレベルを上げるといふ難しい課題を抱えていると言えます。特に若い人たちの中には今の生活を維持するのに苦労するという現実もあります。

しかし他方余暇人口は着実に増加しております。そのような状況下で委員は重要な役割を担っていると思えます。

一般会員として過ごした中で会員同士、委員と委員のコミュニケーションの重要性を感じておりました。それらを踏まえて委員として課題の解決に少しでも貢献できるように努力したいと考えております。よろしくお願ひ致します。



神奈川県 川奈 千鶴子

この度委員のお仲間に入れて頂きました。新日美との出会いは昔勤労者美術展

が横浜のギャラリーであり、そこに友人が出品し賞を頂いた作品を見に行った時のこと、その会場で審査員としていらしたのが鈴木博介先生でした。「君も油絵描くの？それならボクのいる会に出品してみないか？」と誘って下さいました。

そのころは小品ばかりで公募展に出品するような大作を手掛けたことがなくお断りしたのですが、たまたま自作の絵の写真を持参していたのを見て頂いたところこれを大きく描いてごらん見せてあげると、応募してみなさい。」と言われました。

お言葉に甘え鈴木博介先生にご指導いただき、初出品、初入選させていただきましたのが一九八九年でした。その後何年か外に出ましたが、ある時、鈴木健夫先生から戻ってこないか？とお声をかけて頂き再びお世話になる事になりました。

去年までは送られてきた会報をのんびり読ませて頂いておりましたが、四月に委員のお仲間に入りまして、配送等の大変なこと、委員の皆様のご苦労が初めてわかりました。これからは、お世話になった会に微力ではありますがご恩返しのため頑張りたいと思えます。よろしくお願ひ申し上げます。

委員コラム

日本画の特異性について

児玉八千穂

日本画(岩絵の具の着色画)は洋画(主に油彩画)とどこが違うのかよく聞かれます。具象画に限ってはありますが、私の考えを昨年の東京支部の会報誌に寄稿しました。その中では、第一に違うのは視線の行方だと思われました。

一番理解しやすいのが木立のある風景画で、作者がキャンバスという枠の中に遠近や色彩で完結させている洋画に対し、日本画は作者自身が風景の中にいるので、枠が無く完結しません。洋画の典型的な例は並木道で、日本画は雑木林です。洋画は一眼レフな手法で、視線は画面の奥へと誘導されますが、日本画は雑木林の中でたくさんの樹木が作者の視界からはみ出すので、目の前にある樹木を観察し、形や質感の細かい描写になるため、見る者は画面の外に広がりを感じながら、視線はその場に留まります。それが日本画の臨場感と言っわけです。

そして、今回述べたい第二の違いは静物画制作に於ける観察の仕方です。例えば花を描く場合、何だかこの構図だと絵的に面白くないなと思つて、花や葉などを増殖したことはありませんか？洋画の場合、まずは粗方の構図が決まればデッサンで、次に美しい色彩や陰影、タッチの追究で立体感を描くものではないでしょうか。もしかしら本物より説得力のあるそれは、正面からじっくり見捉えた、洋画ならではの技法なのです。

ところが日本画の場合は、花を描く時はまずその花の成り立ちを観察します。花びらは何枚でどのように付いているか、から始まってしつこく観察しているうちに、その花に相応しい形構図が見い出されます。花の成り立ちを理解しているの、やがて見なくても描けるようになりますし、そこに様式美としての形(構図)が生まれるのです。つまり第一、第二の違いが述べたいのは、日本画を洋画と同様の奥行きや立体感で見ようとしても無理だと言っわけです。

このような違いを念頭に置いて頂けたら、より深く、楽しく日本画を鑑賞して頂けるのではないかと思います。